
雪と風と

こたつむり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪と風と

【コード】

N64970

【作者名】

こたつむり

【あらすじ】

京都のある土地を舞台にして、主人公が不思議な体験をします。

降っても積もらず、すぐに溶けて消える。一夜の幻。

これは、この土地に降る雪のようなお話。

そして、名残雪のお話。

寒い。寒い、寒い、寒い、寒い！もう暦の上では春だというのに、吐く息が白い。飲みに行った帰り、予定よりもだいぶ遅くなってしまうたが、それにしても寒い。首をすくめ、少し前屈みになつて歩く。

山の天気は変わりやすい。まあ、ここ衣笠は山と呼べるか微妙なところなのだけれど……。それでも、急に冷え込んだり、天気が崩れたりすることがままある。そんなことは知っているのだが、予測できるはずもない。つーか、わかるかボケー、とやり場のない怒りは寒空に消えた。

長い坂道を歩いてしていると、鼻先にひやりと冷たい感触。空を見上げれば、白い結晶がひらりはらりと降ってきた。今の季節は、桜だるうに。

「なんで雪まで降るし」と、思わずひとりごちる。

雪はみるみる本降りになって、これはたまらないと、アパートの駐輪場を拝借して、雨宿りならぬ雪宿り。肩やら頭やらに薄ら積もった雪を払い落とす。しかし、寒さはどうにもならず、歯の根が合わない。首をすくめて、その場で足踏み。手をすり合わせたり、息をかけた。しばらくそうしていると、風がビュツと吹き荒れた。

「うおっ」

反射的に目をつぶる。ズズツと鼻をすすって、

「んも〜、勘弁してくれよ〜」

と、ひとりごちたと思ったのだが、

「おにーさん、お困り？」

と、隣りからかわいい声。顔を向けると、そこにはかわいい女の子がにこつと笑って、こちらを見上げていた。手には白い傘、肩にセカンドバック、黒く長い髪を後ろでひとつにくくっていて、小さな鈴をつけている。顔にはまだ幼さが残っているから、どうやら年下っぽい。高校生くらいだろうか。

「あー、困っているには困っているんだが、とりあえず、君はだれだ？そして、なにをしている？」

至極当然な疑問をぶつけてみた。

「私は雪原風音ゆきのほらかさねっていいます。それで、こんな雪の中立ち往生しているおにーさんを見つけたから、職質をかけてるところです」

と返ってきましたよ。変わった子がいたもんですネ。あっはっは。

「そうかい。じゃ、風音ちゃん、もう遅いから気をつけて帰るんだよ」

紳士的に微笑んで、背中を押す。

「ちよくと、ストップ。待ってたら。おにーさん、困ってるんですよ？」

こつちを見かえりながら言う。

「ん〜、まあ、そうだけど」

「でしょでしょ！」

そう言いながら、バックをこそこそやる。

「はい！傘！それと、これも！」

押し付けるように渡されたのは、白い折り畳み傘と桜色の上着。ジヤンパー？カーディガン？不思議な感触の生地だ。

「????？」

「それ、かしたげるよ。傘が無くて困ってたんでしょ？こんなとこにいたら、風邪、ひくよ」

「いいのか？いつ返せるか、わからないぞ」

不思議と疑う気は起きなかった。

「いーよ、いーよ！別に返してもらわなくてもいいし」

風音は、手をパタパタとふって言う。

「そか、んじゃ、ありがたく借りとくよ。ありがとう」
胸が温かくなつて、自然と頬がゆるむ。

「どういたしまして」

それは、こう言った彼女の笑顔が、どこまでも無邪気で、明るかったからだろうか。その笑顔は、まるで雪のように、真っ白だった。

翌朝、朝起きたら大惨事だった。寝返りをうつと、パシャツと顔に冷水が。まさに寝耳に水(？) 一気に覚醒した。そこからが大変で、結構大きな水たまりができてるし、狭いワンルームだから、布団も絨毯も濡れるし、ついでに寝巻も濡れた、寝返りをうつた時にまあ、しかし、何より驚いたのは、昨日借りた傘と服がなくなつていて、それらを置いてあつた場所に水たまりができていたことだったんだけど。

それで、この辺が地元の友達、佐東啓吾にこの話をしてみたら、面白い話が聞けた。というか、いきなり大笑いされた。なんか、腹立つ。

それはそれとして、なんでも、あいつが言うには、この辺りにはいつのころからか、人好きでいたずら好きな女の子の神様が住み着いて、時折人の前に現れては、手を貸してくれてんだか、迷惑かけてんだかわからないことをしていくのだそうだ。なんか、妙に納得してしまった。

「俺のジイさんやバアさんも会ったことがあるそうだ。因みに、俺もな。これもジイさんに聞いたんだが、この辺の地名の衣笠はあいつが由来なんだと。服と傘、古くは衣と笠だな、それで衣笠。この辺でよく見る小さい祠、あんだろ？あれには、あいつも祀られてるんだとさ。暇なら、お礼参りにでも行けよ、一応な」

とは奴の言。嬉しそうに話してたのが、少し印象的だった。

それからしばらく後、桜の季節、お礼参りに出かけた。まあ、出かけると言つほどの距離でも、場所でもなかつたけれど。桜を一枝

供えて、感謝と恨みごとを少々。

目を開けた時、突き抜けるような青空に、鈴の音が響いたような気がした。

(後書き)

元は、学校のレポートのために作成したものです。お題は、現代を舞台にした地名由来神話でした。北野天満宮の道真さんとか、元・人の神様をモチーフにしています。少しでも楽しんでいただけたならよいのですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6497o/>

雪と風と

2010年11月2日00時47分発行